

地域コミュニティにおける選択的人間関係形成の場に関する研究 －埼玉県川口市S地区の場合－

日大生産工(院) ○田口 慎子
日大生産工 曾根 陽子

1 はじめに

本研究は、1960年代に一斉開発された「ミニ開発住宅地」の一つである埼玉県川口市S地区における開発の過程と現状及び地区内に近年見られるコミュニケーションの実態に関する研究の一部である。

既報^{文1)2)3)}では、飲食店・小売商店・公民館等を研究対象施設とし、この地区における近隣交流の実態を調査し、地域コミュニティにおける選択的人間関係の重要性を報告した。

本論では、この地区のコミュニティにおいて、選択的人間関係が形成される場について報告する。

2 調査概要

(1) 住戸アンケート調査

調査対象：研究対象地区内^{注1)}の各住戸に、町会を通じアンケートを配布・回収した。研究対象地区の全住戸804件に配布し、335件（41.7%）回収。有効回答率は313件（38.9%）。

内容：地区内の付き合いの内容と程度（5項目4段階）、立ち話の有無と場所（7項目）、地区内の趣味や遊び仲間の有無と種類（20項目）を選択形式。

調査期間：2005年7月

(2) 利用者アンケート調査

調査対象：地区内の飲み屋6店の客（97名）、小売商店2店の客（412名）および公民館1館の利用者（477名）。
内容：年齢、居住地、利用・参加頻度。

調査期間：2004年12月、2006年6月～2007年4月。

3 結果と考察

3.1 地区内での付き合いの種類と程度

地区内での付き合いの種類は図1に示すとおり、「顔見知りの人」「あいさつする人」「立ち話をする人」「趣味仲間」「訪問する人」の順に親しさの度合いが濃くなっている。それぞれの付き合い別に有する人数を「非常に多い」「10人以上いる」「数名いる」「いない」の4段階で回答を得た。親しさの度合いの薄い

「顔見知りの人」「あいさつする人」はほぼ全ての人が数名以上と多い。それぞれの付き合い別に地区内で交流する人数は、当然のことながら親しさの度合いは増すごとに少なくなるが、親しさの度合いは最も濃い「訪問する人」ですら約7割の人が数名以上いると回答した。他の同種の研究と比べこの地域は近隣交流の度合いが極めて多い。

地区の世帯主の年齢構成は60代が突出しているため、世帯主の年齢別にそれぞれの付き合いの種類の人数を百分率で見ると、親しさの度合いが薄い「顔見知りの人」と「あいさつする人」ではほぼ全ての世代で10名以上いると回答した人が半数存在する。親しさの度合

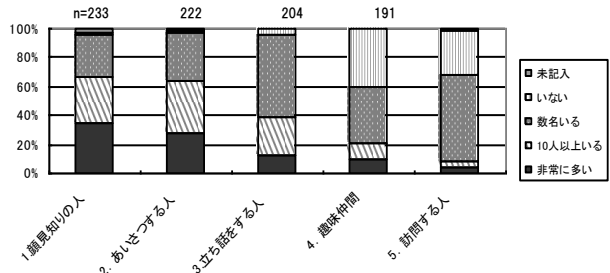


図1 地区内の付き合いの種類

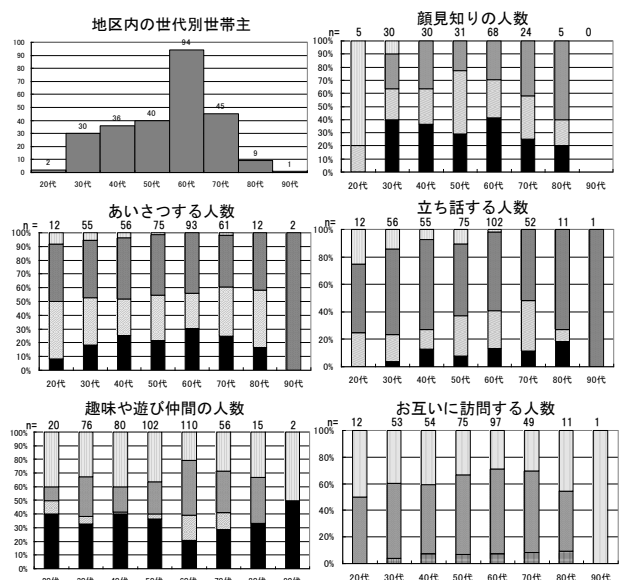


図2 付き合いの種類と世帯主の年齢

A Study on the Importance of Interpersonal Relationships in the Local Society
－ A case study of S district in Kawaguchi-shi, Saitama Prefecture －

Makiko TAGUCHI and Yoke SONE

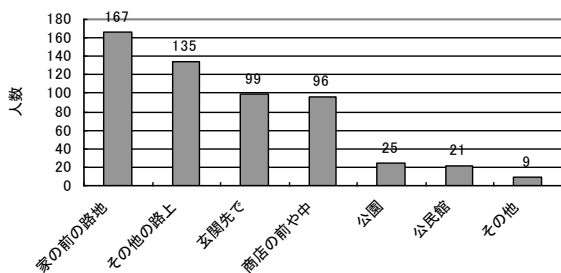


図3 立ち話の場所



図4 立ち話をする路地

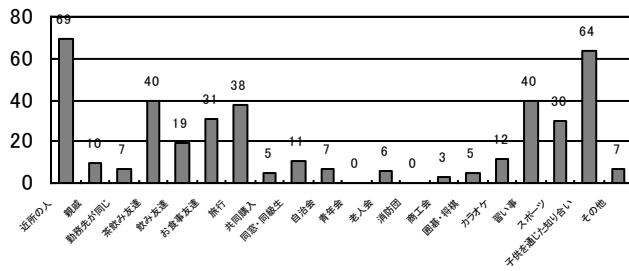


図5 地区内の趣味や遊びのグループ

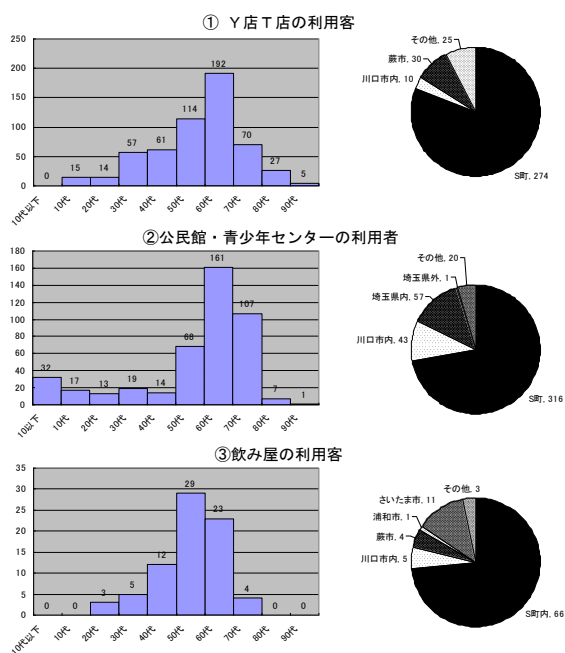


図6 利用者の年齢構成と居住地

いが比較的濃い「立ち話する人」は全ての世代で10名以上いると回答した人は半数以下だが、全ての世代で数名以上いると回答した人は7割以上いる。親しさの度合いの最も濃い「訪問する人」でも90代以外では半数以上の人が数名いると回答している。

このことから、この地区では全ての世代において、地区内での付き合いが多いことがわかる。

3.2 地区内での付き合いの場合

図2で示すとおり、地区内で「立ち話をする人」は全ての世代で7割以上の人が数名以上いると回答した。その人たちが立ち話する場所は「家の前の路地」が167人で一番多く、「その他の路上」「玄関先で」を合わせて7割以上の人が路地で立ち話をしている。(図3) 彼らは道幅の広い道路や通過交通の多い道路ではなく、行き止まりの路地や2項道路で立ち話をする。(図4)

立ち話をする場所で4番目に多いのは「商店の前や中」(96人)である。図6はこの地区の代表的な小売商店であるY店とT店の客の年齢構成を示す。客は60代が極めて多い。尚、Y店T店の客の8割はS地区居住者である。

図2に示すとおり、地区内の「趣味や遊びの仲間」は90代以外の世代で6割の人が数名いると回答した。この地区には趣味や遊びのグループが数多く存在している。(図5) これらの活動の拠点^{注2)}の例である、飲み屋や公民館、青少年センターの利用者の世代は図6に示すとおり50代から70代が中心である。これらの施設の利用者の7割以上がこの地区の住民者である。

このことから、地区内の趣味や遊びの仲間は世代に関係なく同等に多数存在するが、地区に根ざした商店や施設を利用して近隣交流を行っているのは高齢者が中心である。

注釈

- 1) 本研究はS地区全域を研究対象としているが、住戸アンケートはミニ開発当初の面影を色濃く残しているエリアを対象に行った。
- 2) 趣味や遊びのグループの活動拠点としては、地区内には公民館や青少年センター、飲み屋の他に、個人運営の習字教室や華道教室も存在している。

参考文献

- 1) 曾根陽子、武田有紀:1960年代のミニ開発住宅地における研究—その1 飲み屋の利用実態から— 日本建築学会計画系論文集 第608号 2006年10月 P.11-18
- 2) 曾根陽子、香山愛理:高齢者層の交流の場としての近隣型小売商店の役割—1960年代のミニ開発住宅地における近隣コミュニケーションに関する研究 その2— 日本建築学会計画系論文集 第635号 2009年1月 P.83-89
- 3) 田口慎子、曾根陽子:コミュニティ京成に果たすグループ活動とキーパーソンの役割—1960年代のミニ開発住宅地における近隣コミュニケーションに関する研究 その3— 日本建築学会計画系論文集 第648号 2010年2月 P.343-351